

復元竪穴住居 1棟

この竪穴住居は、近くの水田などとあわせて『古墳時代の生活が体験できる場』として、復元した建物です。

復元に当たっては、音浦遺跡（和歌山市鳴神）で発掘（1978年）された古墳時代後期（約1500年前）の竪穴住居跡をもとに、研究成果や各地の復元住居を参考にして復元しました。地面に穴を掘り（竪穴）、板で囲った壁を地面より高く築いて屋内としています。内部の床面は正面4.5m・奥行き5.2mで23.4㎡の広さがあり、畳に換算すると14畳ほどの広さとなります。

西の出入り口から入ると土間が広がり、中央に4本の太い柱を立て、大きな屋根を支えています。この柱は掘立柱という古い形式で、深い穴を掘って柱を立て、電柱のように自立している構造です。右の壁際には炊飯用のカマドを、左奥の隅には食料を貯めておく貯蔵穴を備えています。

柱の上には横の材料（梁と桁）を置き、急傾斜で中央に向かう多くの材料（垂木）を渡して、茅という植物で屋根を葺いています。屋根の形は入母屋造といわれる形式で、正面と背面の頂上には三角形の煙出しが付いています。

この時代の竪穴住居には床・窓・天井などがなく、すべてこの一部屋で生活していました。

この竪穴住居の低い軒先を持ち上げて、内部に床を張った状態を想像してください。山すそに移築されている江戸時代の農家（2棟）と比べてみると、千数百年の時代差がありながら、共通点が多いことに驚くことでしょう！